秋田雨雀・土方与志記念
青年劇場

青年劇場の
演劇ワークショップ

私たちの物語を、創り、出会う―

私たちの物語を、創り、出会う―

演劇ワークショップで何ができる？

青年劇場では、今を生きる人々のために、より豊かで、芸術性、社会性のある作品づくりに取り組んできました。それとともに劇団創設時から、観るだけではなく「演じる」楽しさも知ってほしいという思いで、演劇ワークショップを続けてきました。

近年、演劇ワークショップの要望は多様化し、またその重要性も多方面から語られるようになりました。私たち自身が「演劇の力」に気付き、驚かされる場面も多々あります。
「演劇の力」の可能性をひろげ、社会に貢献できることは、劇団の大きな喜びでもあります。

このパンフレットでは青年劇場の「演劇ワークショップ」の実践例をご紹介します。私たちは演劇の力を信じ、可能性を追求し、皆さんと一緒にどんな素敵なワークショップができるかを考えたいと思っています。その手掛かりになれば幸いです。

学校や職場・家庭など、社会のあらゆる場面で求められる「コミュニケーション力」と「創造的想像力」。その力を発揮するために必要な脳の機能向上には「演劇体験」がとても有効であると脳科学者は語っています。演劇体験にはいわゆる「鑑賞型」と「表現（参加）型」があると言われますが、「演劇鑑賞と表現は、密接に関係しながら、継続されていく必要がある」と研究者は報告しています。演劇は「観る」ことも「やる」ことも生きる力になるのです。

私たちは孤立しているのではなく、だれかとつながって生きています。演劇を創る事、あるいは演劇的手法を用いたワークショップは、コミュニケーションの大切さや楽しさを知り、新たな自分と出会い、生きる力ともなります。現実世界を生き抜くためのリハーサルであるかもしれません。
「人との交流が楽しくなった」「新しい自分を発見した」などの感想が溢れる演劇ワークショップは「出会いの実験室」です。あなたも扉を開けてみませんか？

参考文献
「ＪＯＩＮ（日本劇団協議会刊）104 号茂木健一郎氏講演」・「児童・青少年演劇ジャーナル「げき」（晩成書房）25 号より『演劇活動と脳科学』（塚田稔氏対談）及び『表現のために演劇鑑賞する重要性』（小林由利子氏論文）」」

演劇 WS（ワークショップ）でできること

共感力　表現力　想像力　コミュニケーション力

ちがう自分
になってみる
悪役？ヒロイン？
カエル！？
どんなものにでも
なれるぞ！

シアターゲームで
楽しくあそぼう！

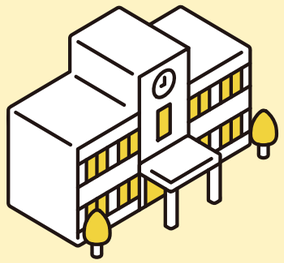
発見！
知らなかった
自分の意外な
一面・・・

目次

P02 ・・・・・ ごあいさつ　私たちの物語を、創り、出会う―演劇ワークショップで何ができる？
P04 ・・・・・ 教育の現場で　学校現場での演劇ワークショップの可能性
P06 ・・・・・ 演劇でまちづくり　公立文化施設・ホールでの芸術文化活動
P08 ・・・・・ 生きづらさを抱えた若者たちと　社会包摂としての演劇ワークショップ
P09 ・・・・・ 寄稿　青砥恭「青年劇場とさいたまユースの若者たち」
P10 ・・・・・ 劇団ならではの取り組み　青年劇場が主催する演劇プログラム
P12 ・・・・・ 劇団紹介　青年劇場はこんな劇団です

教育の現場で

学校での演劇ワークショップの可能性



「人は人の中で成長する」という言葉があります。先生方の中にも知識教育だけではなく、豊かな人間関係を構築する力を育みたいという声はたえません。
かつては、隣近所の子どもたちが年齢に関係なく、自分たちで遊びのルールを創り、ハンディを加え、全力で遊ぶという学びの場がありました。
ところが近年、学校現場でも芸術鑑賞行事や文化的な行事が縮小され、集団で体験を共有する機会が減っています。
点数では評価できない子どもたちの力、それは限りないもの・・・教育現場において行う演劇ワークショップは、それらを育む力になるのではないでしょうか。
青年劇場は「今の中高生にどんな作品を届けたいか」を常に考え、青少年との関わりを大切にしてきました。演劇ワークショップも現場の先生方と協力して、子どもたちを真ん中に置き、多様な形態で実施しています。

- # クラス演劇の指導
- # 演劇部の外部指導員、大会審査員・講習会への講師派遣
- # 教員のスキルアップのための体験講座
- # 総合学習、道徳の授業への講師派遣
- # 大学での表現・コミュニケーションワークショップ講座

演劇を「観る」ことと「やる」ことはセットで

中学・高校時代に演劇を鑑賞することは素晴らしい経験です。現場の先生方は、今子どもたちに見せたい作品を探し、鑑賞行事を企画されます。そんな先生との繋がりからこんな挑戦がスタートしました。
「文化祭でクラス演劇をやるので、その指導をお願いできませんか？」
文化祭に向けて、劇団員が入れ代わり立ち代わり学校に通い、生徒さんといっしょに作品を立ち上げていきました。俳優のノウハウはもちろん、照明の使い方などもプロの視点が加わることで変化していきます。生徒さんは自分たちで考えた作品の世界に新たな発見をし、楽しんで向き合ってくれました。
夢は広がり≪道徳の授業時間を使い、一年かけて脚本づくりから演劇を立ち上げる≫という企画も生まれました。
自分というものが分からなくなっている子、精神的に病んでしまう子、不登校になってしまう子もたくさんいる学校現場。＜観ること・やること＞２つの演劇の力を使って、ひとりひとりの個性や可能性を広げていく挑戦をこれからも続けたいと思います。

演劇部を応援！

青年劇場は劇団創立当時から中学高校の演劇部と深く繋がりを持ってきました。各大会の審査員、あるいは生徒や顧問対象の研修会の講師、また各学校に外部指導員として参加し、活動を応援する劇団員も多くいます。
「表現技術の向上」「チームワークを学ぶ」「他者に影響を与える」「多様な他者とその価値観を受け入れる」･･･、このように演劇創造で獲得できるものは多様です。生徒の皆さんが豊かな社会性を身につける機会としても、演劇部の活動はとても大切なものです。
しかし、演劇部は年々減少傾向にあります。（※）
これからも私たちは顧問の先生方と協力しながら、演劇部の生徒さんとともに、一緒に充実した時間を作っていきたいと考えています。

（※東京都中学校演劇教育研究会 HP によると、2005 年には都内で 186 校あった地区大会出場校が、2021 年には 127 校まで減少。17 年間で 59 校も減ったということです。）

顧問の先生方の声

- 普段教室では見せない様な明るい笑顔だった
- 生徒たちが集中して動き、心を開いていく様子に感心
- 生徒が指示待ちでなく自分から行動するようになった

定時制高校 ＳＳＴの授業

私たちは定時制高校のＳＳＴ（ソーシャルスキルトレーニング）の授業でゲスト講師を務めました。『出会いを楽しむ。失敗も楽しむ』と題して遊びながら他人と交流する事に挑戦。「クラスメイトと名前を呼び合うのが新鮮だった」という感想や、大爆笑の即興劇に「いきなりあそこまでできたのがすごい。とてもおもしろかった」という声も聞かれました。
先生からは「普段見せない生徒の顔が見られて良かった」と、演劇の効用に興味を持たれた様子です。
コミュニケーションをはじめとするソーシャルスキルの育成は様々な場で求められています。楽しみながら社会性を学べる演劇ワークショップはこれからも多くの生徒さんのお役に立てそうです。

参加者の感想

- 自分の思いを表現することの大切さを学べてよかった

他にも

栃木県立足利南高校や東京都立総合芸術高校などに年間で講師派遣をしています。

高校での成果発表

高校での演劇の授業

大学での表現・コミュニケーションの授業

演劇でまちづくり

公立文化施設・ホールでの芸術文化活動

どの町にも「演劇が好き・興味がある・やってみたい！」という方々がいます。ところが演劇は集団芸術です。一人ではどこから始めていいやら‥。自分の町に誰でも参加できる演劇創作の場所があったら・・。公立文化施設がこんな声にこたえて企画してくれたら、ぜひ参加したいという声は必ずあるはずです。ただ、「演劇創作は時間も手間もかかりそう、職員の手に負えない」と二の足を踏む声があることも事実です。私たちはこのような取り組みに必要な企画・製作・指導を会館と連携し、演劇を通して豊かなコミュニティ、町づくりのお手伝いをしたいと思います。

- # 市民劇
- # 会館付属劇団の創設
- # シニア・子どものための演劇プログラム
- # プロフェッショナルによる演劇作品の共同創作
- # 市民によるリーディング公演
- # 地域文化団体コラボ企画
- # 地域に居住する外国人とのコミュニケーションワークショップ

上記のような取り組みに必要な、企画・製作・指導（上演に必要な演出者・スタッフ等の派遣含め）等の連携、協力をいたします。

栃木県足利市

栃木県足利市はアマチュア劇団が４～５団体あり、演劇活動が盛んな町です。これは演劇祭などを企画し地元の演劇人を支援し続けた公立文化施設「足利市民プラザ」の成果です。シニア世代からも演劇をやってみたいという声があがり、会館の付属劇団としてシニア劇団「燦 SAN」を立ち上げ、企画・製作、指導から上演までを青年劇場が応援しています。
足利市では、子どものための演劇プログラムや、アマチュア劇団向けのスキルアップを目指した公演、こども＆シニア演劇養成教室等市民の皆さんのニーズに応える事業を会館とともに企画し実施しています。

参加者の声

- 人生絶賛迷い中で自分でどんなだっけという日々が続いていた中で、演劇のお陰で自分が保てているような気がします。
- 参加者１人１人のことを大切にしないといけないということを学びました。

和歌山県和歌山市

和歌山市　和歌山城ホール（和歌山市民会館）では中学生以上の市民向けに「演劇大学」を立ち上げ、およそ４０日間の稽古を重ね、様々な演劇公演を実施してきました。舞台を作り上げ、観客の前に立つことの喜びは大きく広がっていきます。参加者は宣伝活動から、道具作り、観客動員まで、演劇活動に必要なことを学びます。何よりチームワークの重要性を確信し、本番をむかえます。日常では味わえない感動や、より高い創造性を目指す気持ちが継続の力となっているのでしょう。この他にも戯曲講座、リーディング公演等の企画も実施しています。

参加者の声

- 様々な年代、背景の方が集まり一つの作品を作り上げるという空間は、今の時代、非常に貴重だと感じます。
- 演劇大学との出会い、先生方や仲間たちとの出会いは、私の誇り、自慢の一つです。

例えばこんなことをやってまーす！

戯曲・演出講座

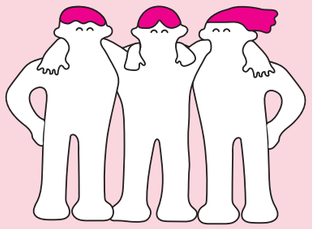
俳優の為のワークショップにくらべ、台本の書き方・演出の方法を学べる機会はまだまだ少ないようです。スタンダードな台本の書き方の基礎を知り、短い作品を書いてみる。それぞれの作品は講師によるリライトを受け、より充実したものになります。
その作品を上演することにもトライするなら、作品の持つ魅力を活かす演出方法も学べます。音響、照明、舞台美術等の考え方をディスカッションしながら、舞台に立ち上げる面白さを体験できます。
地域文化の担い手が生まれるかもしれません。

子どものための演劇プログラム

声を出すことの楽しさ、身体を使った表現、どんどん広がる想像力。子どものためのプログラムは冒険がいっぱいです。子どもにとって大切な「遊び」には俳優に必要な要素がたくさんあります。
心を開くこと、身体を開くこと、他者との関わりを軸に夢中になれるプログラムをつくります。

生きづらさを抱えた若者たちと

社会包摂としての演劇ワークショップ



近年、演劇ワークショップにおける「社会包摂」の機能が注目されています。社会包摂とは、社会的に弱い立場に置かれている人たちを排除するのではなく、違いのある人たちを違いのあるまま受け入れる社会を目指そうという考え方です。青年劇場では、自立支援ルームや発達障がい支援センターなど福祉団体での演劇ワークショップを実施しています。日常から少し離れて自分を表現できる場、みんなが平等で共に学び合える場、お互いの存在自体を認めて多様性が尊重される場、演劇を通してそんな居場所作りを目指しています。

若者自立支援施設での演劇ワークショップ

知的障がいを抱えた青年たちへの朗読教室

発達障がい支援センターでの表現力とコミュニケーションプログラム

大人の発達障がい者支援センターでのワークショップ

発達障がいとは生まれつきの脳の機能障がいで、人によって個人差があります。対人関係・社会性・想像力等に困難があり、身体症状のある方もいます。「コミュニケーション障がい」が学校や職場での生きづらさにつながる場合もあります。
ここでは自由に表現しコミュニケーションの楽しさを体験してもらうことを目的にプログラムを組んでいます。例えば、発達障がいの方は相手の目を見て話すことに苦手意識を持つ傾向があるので、アイコンタクトに重点を置いたシアターゲームを実施。「アイコンタクトで気持ちを渡したり、受け取ったりする嬉しさや緊張を感じた」との感想が寄せられています。また、短い台本にも挑戦し、「台詞で普段では言えない事が言えてスッキリした」と役を演じる体験が自己解放につながった例もあります。

参加者の声

●「あるがままの自分を受け入れ、受け入れられる」の言葉を最初にもらい、自分を変えなくちゃと思っていた私にはホッとできた時間でした。目を見て話すことは本来楽しいし、気持ちが温かくなることだったなーと思いました。

さいたま市若者自立支援ルーム演劇プログラム

- 文化庁委託事業 日本劇団協議会主催「やってみようプロジェクト」

青年劇場はNPO法人さいたまユースサポートネットと協力し、若者自立支援ルームを利用している青年を対象にワークショップを実施しています。ルーム利用者の多くは貧困や疾患・障がい等で生きづらさを抱えています。演劇を通して交流し相互理解を深め、表現することにもチャレンジしてきました。利用者の自立の後押しをすることを目標に、2022年で6年目を迎えました。脚本を執筆する参加者も複数名現れ、お互いの作風を尊敬し合う仲になっています。コロナ感染症の影響で発表の機会がなかなか得られない中で、ワークショップ風景を撮影・編集して映像作品にする新たな挑戦も大成功しました。

寄稿

青年劇場とさいたまユースの若者たち

青砥 恭（NPO法人さいたまユースサポートネット代表）

私たちが、不登校や高校中退などで居場所がなく、孤立して暮らす貧困層の若者の学びを支えようと、さいたま市内で「たまり場」と名付けた居場所づくり活動を始めて12年になる。今から考えると無謀とも思える活動だったのかもしれない。これほどの数の若者たちがこの小さな居場所を求めてくるとは全く想像していなかった。しかも、かれらの育ちを聞いていくと、「よく生きていたね」と驚かされるような若者たちがここにやってきた。
中にはホームレス生活をしていた、両親ともいない、家族がいない、親はいても虐待を受けて児童養護施設で育った、そんな若者たちが毎週土曜日30人～50人ほどがやってくるのである。この12年で1000人を超える若者たちが「たまり場」をノックした。

その中にさとし君（仮名）という10代後半の少年がいた。両親は早くに離婚して、母親と弟の3人で暮らしていた。母親は子どもたちを養育することができず、彼はある町の自立援助ホームで暮らしていた。定時制高校にも通っていたが、自立援助ホームで暮らすためには、自立のための準備として働いて、そのうちの3万円程度払わなければならなかった。ただ、さとし君は、虐待の後遺症か、体力がなくてなかなか働けず、自立援助ホームの寮長さんからたびたび苦情が出るような若者だった。
一度、彼に頼まれて、仕事を紹介したことがある。友人の会社社長に、「こういう若者がいるんだけど、お金はいるが、そんなに体力はない」、という少々あり得ない頼みだったが、友人社長は、知人の店で、簡単な仕事を探してみようと、ぼくとさとし君をその店に連れて行ってくれた。仕事は、お昼前後の2，3時間、ランチの客のご飯を茶碗に盛ることと、客が帰った後に食器を下げる仕事で、接客もなく、そんなに負担があるとも思えなく、それで時給は1000円という当時は破格の高さで、僕はその店の主人と友人社長のあたたかさに感動したものだった。

しかし、さとし君がその店で働くことができたのは1日だけだった。2日目には、体力がなく、店にも行けなかった。僕は驚いて、お店に謝りに行った。

それから、さとし君との関わりは10年になる。今は、ある会社の営業社員として元気に働いている。何があったのか。一番大きなきっかけは青年劇場である。
青年劇場に「さいたまユースの居場所に来る若者たちを援助して」とお願いして、6年になる。中でも、さとし君は最も活躍した若者の一人である。2017年の『俺たちは天使じゃない』は30分の演劇として、クリスマス会でさいたま市長や市議会議員の前で演じられた。映画では、ロバート・デ・ニーロとショーン・ペンが主演し、刑務所の脱獄に成功した二人の男が国境を越えるために神父に成りすましたことで、信者たちに本物の神父だと間違われてしまう。という話だが、この人情劇を脚本を書き直してクリスマス会の日に、さいたま市長の前で主演した。主演はさとし君たち二人だが、練習でも、体調不良でたびたび休んでいて、この日に、二人が会場に表れたときは、安心とうれしさ？で涙がこぼれたことを思い出す。心配で正面から見ることができなかった。しかし、彼らは、僕の心配など関係なく、完璧にセリフを自分のものにして、さらにアドリブまで出た。市長の拍手も素晴らしかった。
それから、6年たった。青年劇場の演劇プログラムは、今はたまり場と若者自立支援ルームでも行われている。このプログラムではどんな若者でも拒まれることはない。どんな状況でも受け止められ、励まされる場である。しかも、演劇は複数の登場人物によって成り立つ、関係性が大切だ。この空間の中で、協働してどうこの芝居を作っていくか、「自分は自分の行動の主人公」という自律性の感覚の中で効力感を形成する。しかも他者とのあたたかい交流、仲間からの認容・教え合いの中で演劇プログラムは営まれる。演劇プログラムはこれまで苦難の中で生きてきた多くの若者が参加した。自らの中の「人間」を取り戻す場なのである。

劇団ならではの取り組み

青年劇場が主催する演劇プログラム

青年劇場スタジオ結は新宿御苑の近くにあり、稽古場としてだけではなくスタジオ公演もできる舞台設備を備えています。
劇団主催の演劇プログラムは主にそのスタジオ結で行い、多くの俳優や技術スタッフが関わることで、ワークショップも発表も充実した内容で実施してきました。
青年劇場という劇団が地域とのつながりの中で文化活動の一つの拠点となれるよう、今後も様々な取り組みを実施していきたいと考えています。

中高生を対象に演劇ワークショップ

幅広い年齢層を対象に短期間開催で

高校生と舞台を作り上げる！「青年劇場が高校生と演劇作るってよ」企画

高校の演劇部とタッグを組んでフェスティバルを開催！

中学生あつまれ！「ENJOY!ENGEKI@ スタジオ結」

- 文化庁「地域文化倶楽部（仮称）創設支援事業」

劇団の稽古場で中学生に気軽に「演劇って楽しい」を感じてもらえる場所を作りたい！と始動したのが「ENJOY！　ENGEKI@ スタジオ結」です。
はじめのうちは緊張していた中学生たちが、いろんな演劇あそびを体験するうちにグッと仲良くなり、表情が明るくなり声が前に出るようになります。最後は短い作品の発表も行い「人前に立つのは苦手だったけどみんなと出来たから楽しかった」「自信がついた」という声も。
稽古場という非日常の空間で人と出会い、演劇を通してつながりを作れる場所。
中学校の演劇部が減少傾向にある昨今、学校や地域との関係を大切にしつつ、今後もより良い形を模索していきます。

保護者の声

● 娘が夏休み明けから不登校になり、同世代の子供達や社会との接点をなんとか無くさせないですむようにと思い、参加させて頂きました。中学校生活が上手くいかず、自信を無くし引っ込み思案になっていた娘でしたが、ワークショップの回を重ねるごとに、生来の明るさを段々と取り戻していくようでした。本番当日は私共も見ちがえるように堂々としていて、別人を見ているような不思議な気持ちがいたしました。演劇を通して別人を演じることで、自分を取り戻せたのだとしたら素晴らしいと思います。

中学生から大人まで短期ワークショップ

青年劇場では「初心者歓迎・年齢不問」のオープンワークショップを実施しています。２～３日間かけて「発声」「呼吸」「ゲーム」「柔軟体操」「殺陣」「即興」から「テキストを使用しての実践」まで盛りだくさん。入門編から応用編まで、参加者の希望や力量に合わせてプログラムを組みます。
　参加者の年齢は中学生から７０代と幅広く、少人数限定で丁寧な個人指導をします。なかには演技の面白さに目覚め、修了後にプロの道に進んだ方もいます。
演劇を体験してみたいけどその時間と場所がないという方にとっても、短期開催だからこそ気軽に参加できます。

参加者の声

● かつて見た『翼をください』をやれてサイコーでした！！
● 色々なことに向き合えました。

「青年劇場が高校生と芝居つくるってよ」企画

劇団創立 50 周年の年、青少年ユースフェスティバルとして、劇団の新作「オールライト」と、高校生による「裸電球に一番近い夏」を同時公演しよう！という企画が立ち上がりました。首都圏の高校生 28 人が参加。約 4 か月の稽古を経て紀伊國屋サザンシアターの舞台に。作品も高校演劇のレパートリーの中から「裸電球に一番近い夏」に巡り合うことができました。これは、今や演劇界を牽引する劇作家の古川健さんが高校時代に書かれた作品です。
高校生と芝居つくるって本当に楽しい！創立以来、芝居を通して高校生と向き合い続けてきた青年劇場が、関東高校演劇連盟の皆さんの力を借りて実現した、画期的な企画です。

参加者の声

● プロの方々の指導のもと紀伊國屋サザンシアターという大舞台に立つことができたことは、一生忘れない貴重な経験になりました。

New! 大人のためのワークショップ

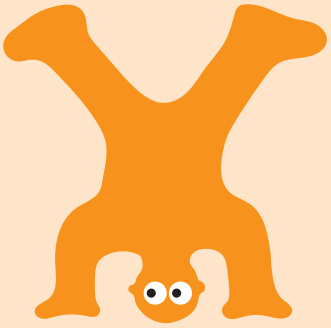
スタジオ結での発表公演を目指しての 15 日～ 20 日間のワークショップ＆稽古プログラム

より「対話」を意識する為の台本を使い、動きのあるリーディング（朗読）作品をつくります。セリフを覚えるのは大変、朗読であれば・・という方々のための、演劇的要素をたくさん盛り込んだワークショップです。演劇にはチームワークが大切。補い合い、高めあって、新しい自分と出会い、新しい仲間とともに舞台に立つ楽しさを体験します。
稽古には講師以外のゲスト俳優も現れ、経験談や、アドバイスも。発表公演は参加者が安心して舞台に立てるよう劇団スタッフがバックアップします！

秋田雨雀・土方与志記念

青年劇場はこんな劇団です

青年劇場は 1964 年、日本演劇のパイオニアである秋田雨雀と土方与志に教えを受けた俳優、演出家 8 名を中心に結成されました。劇団制に基づくアンサンブルの重視、アクチュアルな演劇創造を目指し、日本近現代劇、海外の作品などを意欲的に上演してきました。



東京での公演

年間 2 ～ 3 回の定例公演は、現実社会に絶えず目を向けながら、創作劇や海外の現代演劇など多様な作品を上演。スタジオ結では小劇場の空間を活かした実験的な作品や近代古典を上演してきました。

全国公演

全国の市民劇場、演劇鑑賞会での公演をはじめ、青年劇場を応援して下さる皆さんとの実行委員会公演、公共文化ホール主催公演等、観客の皆さんと共に多彩な活動を展開しています。

青少年のための公演

中学校・高等学校での演劇鑑賞行事、子ども劇場・おやこ劇場での公演。
戦後、土方与志が未来を担う若者たちに優れた演劇を提供しようと精力を傾けた「青少年劇場運動」は劇団の大きな柱です。年間 2 ～ 3 作品を全国で公演しています。「文化芸術による子供育成総合事業」など文化庁委託事業なども行っています。

国際交流

ロシアから演出家・美術家を招いての小劇場公演「かもめ」を上演。また、毎年モスクワより講師を招き「スタニスラフスキーシステムの基礎から学ぶワークショップ」を開催。韓国現代演劇界から演出家、俳優を招き「カムサハムニダ」を上演。その他、イタリア・韓国での公演・フェスティバル参加など。

青年劇場付属養成所

新たな若い才能の発掘と、長い歴史の中で培った演劇技術の継承、演劇の世界を目指す方の道を拓くことを目的として付属養成所を開設しています。
50 年を超える伝統の上に、現在開発されている俳優養成システムを取り入れながら、演劇人として歩むための充実した養成・教育プログラムで好評を得ています。

過去の上演作品

夜の笑い（飯沢匡＝作・演出）
青春の砦（瓜生正美＝脚本・演出）
翼をください（ジェームス三木＝作・演出）
遺産らぷそでぃ（高橋正圀＝脚本　松波喬介＝演出）　他

近年の上演作品

あの夏の絵（福山啓子＝作・演出）
きみはいくさに征ったけれど（大西弘記＝作、関根信一＝演出）
星をかすめる風（イ･ジョンミョン＝原作、シライケイタ＝脚本･演出）
眞理の勇氣–戸坂潤と唯物論研究会（古川健＝作、鵜山仁＝演出）
行きたい場所をどうぞ（瀬戸山美咲＝作、大谷賢治郎＝演出）　他

『行きたい場所をどうぞ』（撮影：宿谷誠）

『星をかすめる風』（撮影：宿谷誠）

お問合せ

演劇ワークショップのプログラム、費用等については、お気軽にお問い合わせ下さい。

03-3352-6990
電話受付　月～金　10:00-18:00
土　10:00-15:00
（日曜・祝日定休）
担当：白木、佐藤、八代

info@seinengekijo.co.jp

〒160-0022
東京都新宿区新宿 2-9-20 問川ビル 4 F

https://www.seinengekijo.co.jp/

2023年5月発行